GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　77

理想の家族、現実の関係：

再編されるマレーシア華人社会の親族関係

櫻田 涼子
（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）

2012 年 9 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia
〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

目次

はじめに
1.　華字紙『星洲日報』と華人社会
　1.1　黎明期：祖国中国と南洋華僑
　1.2　衰退期と発展期：激動の時代における華字紙
　1.3　調査の概要
2. マレーシアのメディア
　2.1　新聞のある風景
　2.2　告知広告記事とはなにか
3. 告知広告記事の変遷
　3.1 通知
　3.2　栄誉祝賀
　3.3　結婚祝賀
　3.4　死に関する記事
　　3.4.1　訃告
　　3.4.2　死に関する記事にみる社会関係のシークエンス
4. 理想の家族、現実の関係
おわりに

はじめに

本研究は、マレーシア華人社会における人間関係、特に親族関係の変化を、マレーシアで発行される中国語新聞（以下本稿では「華字紙」と称する）『星洲日報』に掲載された告知広告記事の検討を通じて明らかにすることを目的とするものである。

本稿で分析資料として扱ったのは、個人が、規定された料金を支払い新聞会社に掲載を依頼する「告知広告記事」である。伝統的に、マレー半島で発行される華字紙にはこれまで様々な種類の告知広告記事が掲載されてきた。それは例えば、葬儀案内を兼ねた死亡告知広告記事（「訃告」）や、死者が生前に所属していた社会組織により掲載される追悼記事（「挽詞」）、遺族が葬列参加に対し謝意を表明する記事（「泣謝」）、結婚を報告する記事（「結婚通知」）、婚約を報告する記事（「訂婚通知」）、結婚を祝う記事（「結婚祝賀」）、親子関係や兄弟関係などの関係終焉を公に宣言する記事（「脱離関係」）、新事業・新店舗の開業を祝う記事（「開店祝賀記事」）、州王スルタンなどによる称号賦与や学位取得、昇進などを祝う記事（「栄誉称号祝賀記事」）など多岐に渡る。

2000 年代の華字紙に掲載されたこれらの告知広告記事の概要とその社会的意味についてはすでに別稿において論じているが［櫻田 2009］、本研究では、マレーシア華人社会の変化を探る資料としてこれらの告知広告記事を措定し、『星洲日報』が創刊された 1929 年か

ら 2012 年までの告知広告記事を抽出し、その掲載傾向の変化を分析することにより、この 83 年間にマレーシア華人社会においてどのような社会関係の変化がみられたのかという点を描出することを目指す。本論に入る前に、まず一見して雑多な告知広告記事を本 GCOE プログラムの研究プロジェクトで扱うことの意義について言及した上で、これまで通俗的な記事として看過されてきた告知広告記事に着目する意義とその資料的価値について指摘したい。

マレーシアは、1957 年にイギリスによる植民地統治から独立を達成した後の経済政策の転換により、国家のあり方だけではなく、そこに住まう人々の暮らしや家族のかたちさえもドラスティックな再編を経験した社会である。1970 年代以降のマレーシアでは、農村開発から工業を中心とする経済構造への転換が目指され、それまで農村居住が主流だったマレー人の都市における経済活動への積極的参加を促し、貧困の根絶と社会再編を重視する新経済政策（New Economic Policy）、通称ブミプトラ政策が国家開発政策の指針となった。経済構造転換の過程で目指されたのは、農村から都市への労働者流入により急増した都市人口の収容を可能にする大量住宅供給を実現すること、さらには最低限の生活の質を国民に保証する住宅供給量の確保することであった。このようにして、住宅団地開発と低価格住宅の供給は、マレーシアの社会構造の再編を目指す近代化政策の一環として行われたのである。

社会福祉政策的側面の強い低価格住宅供給を中心とする住宅政策の施行により、マレーシア国内には核家族の居住を想定した画一的構造の〈近代住宅〉が陸続と誕生し、働き盛りの夫婦と子どもから成る〈近代家族〉が登場することとなった［櫻田 2010］。つまり、1970 年以降のマレーシアにおいても他のアジア諸国同様、急激な近代化、「圧縮された近代」［Chang 1999, 2010］によって社会や家族関係の再編を経験することとなったのである。

また一方で、工業化社会への移行に付随した都市部における賃金労働者の増加は、マレーシアを構成する民族集団のひとつであるマレーシア華人の社会における父系理念という伝統的価値規範により関係づけられる社会関係にも変化をもたらした。「妻」や「嫁」といった伝統的に女性に付されてきた役割は、経済システムの移行とともに変化し、家族のかたちも変化するようになった。例えば世帯を維持する上で重要な子育てという再生産労働は、父系に限らない女性親族間の親密な連帯により柔軟に実践されるようになったのである［櫻田 2011］。

このようにして、筆者はこれまでマレーシア華人社会の家族関係の実際とその変化を明らかにすることを目指し、低価格住宅の住まい方の変化［櫻田 2010］や都市労働に従事しながら故郷で子育てを行う女性たちの実践［櫻田 2011］を調査し、彼らの生活世界を微視的に記述することに努めてきた。これらの作業は、人類学的研究の蓄積があまり多くはなかったマレーシア華人研究において重要な作業であったといえるが、一方で、当該社会の変化を明らかにすることを常に主眼を置きながらも、日常実践の記述に焦点をあてるあま

り、歴史的変遷を十分に議論することができなかったという点が指摘できる。しかし、そもそもこれまでのマレーシア華人研究では、独立以後のマレーシアにおいて政策的に導入された〈近代〉が華人社会にどのような経験の変化をもたらしたのかという問題を十分に議論してはいなったともいえるだろう。マレーシア華人社会が独立以降に経験した急激な社会関係の変化については、さらに幅広い材料をもとに議論されるべき重要な問題であるだろう。このような状況において、本研究はこれまでの筆者による研究と、マレーシア華人社会における〈近代〉の問題を架橋する過渡的な研究に位置付けられる。特にここで意図するのは、今日のマレーシア華人社会でみられる〈家族〉という関係は、当然ながら決して過去から現在まで不変の社会関係ではないということを告知広告記事の分析を通して暴くことにある。

元来、華字紙に掲載される告知広告記事は当該社会の社会関係を描くことを意図して書かれ、掲載され、流通するものではないが、掲載時の社会において重視される出来事がどのようなものであるかを知る一つの手がかりにはなりうる。植民地期台湾の葬儀の変遷について論じた胎中千鶴は「新聞に出ている数行の三面記事のなかにも、小説の数行の描写にも、当時の社会の息づかいが潜んでいる。その中には通俗的な事象や現象もあるだろうが、『通俗』もまたその社会の特性のひとつであり、むしろその社会の人々のリアリティに近づける重要な要素」［胎中 2008：25］であるといい、それらの資料に断片的に表れる社会のリアリティを拾い上げる意義を指摘しているが、告知広告記事に現れるのはマレーシア華人が何に対して誇りや喜び、嫌悪を感じるかといった活き活きとした感情だけではなく、こうありたいと望む理想の自分の姿や家族のかたちでもあるだろう。つまり、胎中が指摘するように、告知広告記事には現実の社会関係が表出される一方で、理想としての社会関係も表出されるのである。このようにして、本研究は告知広告記事の分析を通じてマレーシア華人の社会関係の経年的変遷を明らかにし、彼らの理想と現実の社会関係を描出することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第 1 節において華字紙『星洲日報』の創刊経緯と当時の社会における新聞の位置付けについて簡単に述べた後、英領マラヤから独立を果たした後、国民国家成立へと急激な変化を経験したマレーシアの華人社会における『星洲日報』の社会的意義について簡単に概観する。続く第 2 節において本稿の研究対象とする告知広告記事とはどのような記事であるか、その範囲と定義を示しながら告知広告記事概要を示す。第 3 節では 1929 年から 2012 年までの約 11 か月分の告知広告記事のデータに基づき、特に結婚祝賀記事、栄誉祝賀記事、訃告などの記事の時代ごとの特徴を詳細に概観する。最終節ではこれらの資料を基に、マレーシア華人家族の理想と現実のずれについて指摘し、歴史的変遷の中で家族という社会関係がどのように変化したのかについて考察する。

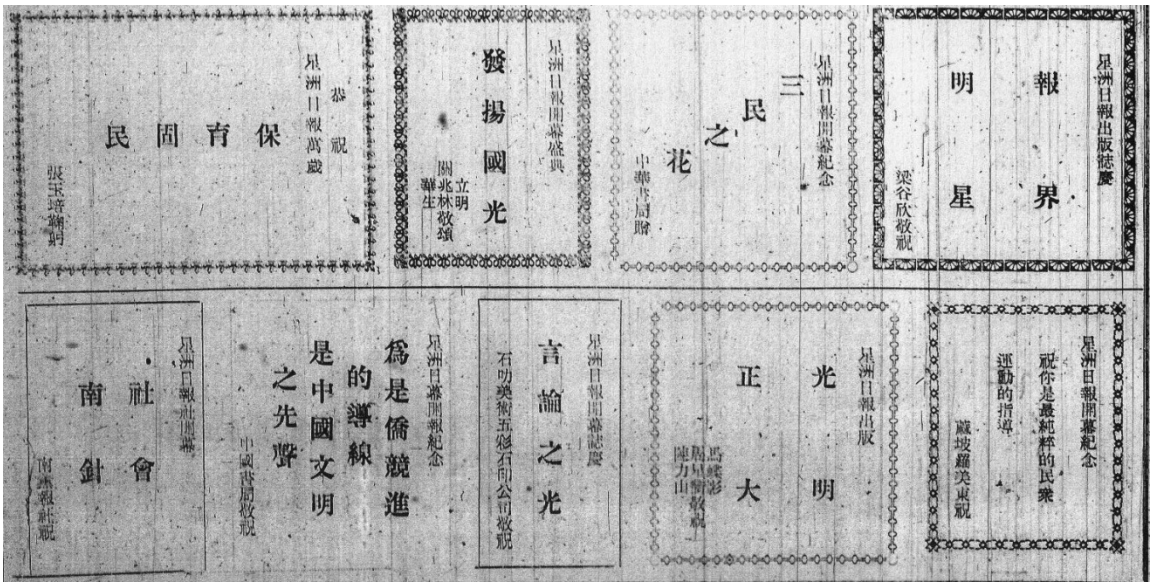
1.　華字紙『星洲日報』と華人社会

1.1　黎明期：祖国中国と南洋華僑

『星洲日報』（Sin Chew Jit Poh[1]）は、1929 年（中華民国 18 年）1 月 15 日にヤンゴン出身の華僑企業家である胡文虎（Aw Boon Haw）がシンガポールにおいて創刊した新聞である。

伝統的に、華僑華人社会では新聞は「僑報」と称され、「僑団」と呼ばれる会館組織などの社会組織、「僑校」と呼ばれる華語学校と並び「僑社三宝」の一つとされ、エスニックアイデンティティの維持・発展にとって重要な制度であると考えられてきた［戴 1991: 31］。胡文虎にとっても新聞は「国民の知識を高め、学校教育の不足を補う」［劉 2002］ものであり、また華僑華人社会にとっても新聞は期待を持って迎えられる重要なメディアであったようだ。1929 年 1 月 15 日発行の創刊号には、書籍店である中華書局や印刷会社、また華人社会の指導的に立場にあったと推察される個人らが「星洲日報出版誌慶」「星洲日報開幕誌慶」と銘打った創刊を祝う祝賀記事を数多く掲載しているが（写真 1 参照）、それらの記事には、「報界明星（新聞業界の星）」、「言論之光」などの出版そのものを祝う文言とともに、「発揚国光」、「保育固民」、「社会南針」、「社会導師」、「祝你是最純粋的民衆運動的指導（貴社における純粋なる民衆運動の指導に対しお祝い申し上げます）」などの文言が並ぶ。

このように、これらの記事からは社会や民衆を指導養育する主体としての新聞の社会的位置づけや、華僑華人社会において重要な役割を担う新聞というメディアに対する人びとの並々ならぬ期待を読み取ることができるだろう。



[1] 標準中国語による表記は Xin Zhou Ri Bao だが、現地では Sin Chew と呼ぶのが一般的である。なお英語の正式名称は Sin Chew Daily である。

写真 1:『星洲日報』の創刊を祝う記事
（1929 年 1 月 15 日）

しかしながら、この時代、新聞が「知識を高める」対象として意図したのは、必ずしもシンガポールや英領マラヤに対して帰属意識を持つ人びとではなく、祖国中国に対する帰属意識や強いつながりを感じる人びとであった点に注意する必要がある。

孫文は「華僑為革命之母（華僑は革命の母なり）」という言葉を残しているが、革命結社であった興中会などの活動に参加し、資金援助を行ったのは多くの海外に住む中国人であった[2]［内田 1967］。孫文の革命運動以来、近代以降の中国の政治勢力は在外中国人の「力」を無視できずにきたばかりでなく、彼らの支持をとりつけるための政策を展開し［戴 1991: 31］、在外中国人社会と中国本土の政治は密接な関係にあったといえる。

それは英領マラヤにおいても同様であった。1929 年 1 月 15 日の『星洲日報』創刊号には、蒋介石（蒋中正）による『星洲日報』の題字や孫文の遺言が掲載され、2 面では山東龍口における日本駐軍の様子や蒋介石の動向などの詳細が報じられている。続く紙面には野蓀による「我們所需要的輿論」と題された論文が掲載されている。論文には「中国不能不要華僑。華僑不能不愛祖国。（中国が華僑を不要とすることは能わず。華僑にとって祖国を愛さないとことも能わず。）」といった一文や、「使南洋華僑充分的作革命援助的工作。使中央政府充分的増進華僑国際的地位。（東南アジア華僑をもって革命のための支援作業にあたらせる。中央政府をもって華僑の国際的地位を高める。）」といった祖国中国と南洋華僑の不離の関係の重要性も書き記されている［星洲日報 1929 年 1 月 15 日］。

中国との密接な関係は一面を飾る記事だけではなく、何気ない広告からも読み取れる。例えば、イギリス植民地であったヤンゴン、海峡植民地ペナン、クアラルンプール、香港、中国南部の厦門、汕頭を結ぶ定期船（豊慶新船）の広告には「愛国僑胞注意」という文言と共に定期船の出航日時が記載され、中国南部と南洋の往来という行為は「愛国華僑」の取る行為であることが示唆される。

また少し時代は新しいが、1941 年に掲載された華僑銀行（Oversea-Chinese Banking Corporation, Limited）の広告記事には、近代的な建物の前を「民信車」と書かれた黒塗りの車が走るシンガポールの様子と、中国の僑郷の平屋建て家屋において送金を受け取る女性と子どもの様子が描かれている（写真 2 参照）。広告の中に書き込まれた矢印に重なるのは紙幣と手紙であり、シンガポールから僑郷への送金に付された手紙には「祖国」の文字がみえ、僑郷からシンガポールへ送られた手紙には南洋某某先生宛てという文字がみえる。この広告からは、1940 年代においても南洋は賃金を稼ぐための逗留場所であり、その賃金

[2] 興中会は 1894 年に倒満興漢の会党として設立されたが、内田によれば「興中会宣言」では国内、国外の中国人と連絡して中華を振興することを目標とすることが明らかにされている程度で、全面的な倒満興漢運動にまでには発展をみていなかったという［内田 1967: 93-94］。

は祖国中国の僑郷へ送金するものであった様子が読み取れる[3]。

写真 2：華僑銀行の広告記事
（1941 年 1 月 13 日）

ここまで概観してきたように、創刊時に掲載された主要な記事を見る限り、『星洲日報』はマレー半島における現地情報を居住者に伝達するだけの媒体というよりは、中国本土の状況や革命家孫文や蒋介石の動向を伝えることに主眼が置かれ、祖国中国との心理的・物理的紐帯を密接にする媒体であったことが分かる。また、少なからず掲載された告知広告記事からも同様に、南洋華僑にとって密接に位置づけられた祖国中国の様子が読み取れる。

しかしながら、新聞は祖国中国と南洋華僑を結ぶ慈善事業や、祖国中国における政治運動を支援する媒体という役割を担っていたわけではなかった。企業家である胡文虎にとって、新聞業は祖国と南洋華僑を結び付ける社会事業としての側面を持ちながらも、一方で胡文虎が経営する虎標永安堂（後の星加坡虎豹兄弟有限公司）の主力商品であるタイガーバームなどの医薬品の宣伝広告を掲載する媒体として重要な意味を持っていた（写真 3・4 参照）。そのため、胡文虎はシンガポールのみではなく南洋地域一体において虎標永安堂の医薬品宣伝を行うべく新聞ネットワークの構築を目指したのである。実際、胡文虎は汕頭、厦門、福州、香港、ペナン、バンコクなどで星の文字がつく新聞を発行し、星新聞系列を

[3] 華僑銀行の広告記事が掲載された 1941 年 1 月 13 日の 14 面には、この他に 4 件の銀行や送金業者の告知広告記事が掲載されている。

構築している［劉 2002］。

写真 3：虎標永安堂の「八卦丹」と「止痛散」の広告

（1950 年 1 月 15 日）

八卦丹の宣伝文句には、暑い中八卦丹を一片口に含めばたちまち喉の渇きが止み半日水を飲まなくてもすむとある

写真 4：虎標永安堂の「虎油」の広告

（1970 年 1 月 23 日）

このような企業家と新聞事業の密接な関係は胡文虎にのみにみられたものではなく、伊賀によれば、華人企業家による新聞事業の商業性と慈善事業的側面の両立は『星洲日報』より 6 年早くシンガポールで創刊された『南洋商報』においても同様であったという［伊賀 2010］。

『南洋商報』の創刊者である陳嘉庚（Tan Kah Kee）は、ゴム農園経営やパイナップル加工などで財をなした中国厦門出身の南洋華僑であった。彼が創刊した『南洋商報』は、1920 年代から 30 年代にかけてはゴムを中心とした商品価格の変動についての情報を提供する唯一の新聞であったという［伊賀 2010: 39］。新聞は企業家としての陳嘉庚の事業促進の役割を担う一方、愛国華僑的慈善家としても知られる陳嘉庚は、中国の出身村である集美に小学校から大学までの学校を設立し、1921 年には僑郷福建厦門に厦門大学を創設している［玉置 2004］。陳嘉庚は『南洋商報』創刊時にも民族と商業発展の基盤としての教育の重要性に言及しており、新聞の創刊は彼が注力した学校設立と共に、華人社会への貢献

としての側面を有していた。

以上ここまで概観してきたように、1920 年代にシンガポールで創刊された華字紙は祖国中国との関係を常に意識したメディアとして出発し、社会を導くという社会的意義を期待されていたことが分かる。

1.2　衰退期と発展期：激動の時代における華字紙

前項でみたように、マレー半島で発行された華字紙は、創刊当時は華人企業家の事業促進を担うと同時に祖国中国と南洋華僑を結び付ける社会的役割を担っていた。しかしながら、戦後から独立期にかけてその状況は一変する。

1940 年代の日本軍によるマラヤ占領期には『星洲日報』は停刊を余儀なくされ、代わりに『昭南日報』が日本軍のプロパガンダメディアとしてシンガポールで発刊されるようになった。

戦後を迎えマラヤ連邦が 1957 年 8 月 31 日にイギリスからの独立を勝ち取ると、当時シンガポールに拠点を置く『星洲日報』はマラヤを潜在的市場とみなし積極的に浸透を図っていったという。しかしながら、1969 年 5 月の華人とマレー人の衝突事件（5 月 13 日事件）を受けて新しく制定されたブミプトラを優遇する新経済政策（New Economic Policy）が施行されるようになると、華字紙の企業経営であってもマレー人を中心とする布陣が求められるようになった。株式所有比率のガイドライン（ブミプトラ 30%、非ブミプトラ 40%、外国人 30%）の設定により、明確な実行力を持ってブミプトラの介入が規定されるようになると、『星洲日報』の経営方針は変更を余儀なくされる。つまり、シンガポールに本社を置く『星洲日報』が株式を保有するマレーシアの子会社を通じてマレーシアの新聞業界をコントロールすることは事実上不可能となったのである。また、1974 年に印刷法（Printing Presses Act）が改正され外国人が出版事業に参入することが禁止されると華字紙の経営と所有が創業者一家の手から離れることとなり、シンガポールに誕生した『星洲日報』のマレーシア化、つまり現地化が加速的に進展することになった［伊賀 2010: 40］。

1987 年 10 月、政府はエスニック間の調和を乱したとされる野党指導者、宗教指導者、教育関係者などを一斉逮捕すると同時に、同様の容疑で『星洲日報』、英字紙 *The Star*、マレー語週刊誌 *Watan* の 3 紙を停刊処分にする治安維持活動「オペラシ・ララン（*Operasi Lalang*）」が行われた［ibid 41］。停刊を経た翌年の 1988 年、『星洲日報』は東マレーシア・サラワク出身で木材会社を経営する華人企業家・張暁卿（Tiong Hiew King）に買収されると急速に業績を回復し、その経営状態を好転させた[4]。

---

[4] 1987 年から 88 年までの停刊については、『星洲日報』ウェブサイトの紹介ページ（http://www.sinchew-i.com/intro/）において次のように説明されている。二度目の発行停止はマレーシア政府の印刷物出版法に規定された印刷出版許可の失効による。社長である張暁卿の努力により 1988 年 4 月 8 日に復刊した（第二次是 1987 年遭馬來西亞政府援引出版和印刷法令吊銷出版准證。1988 年 4 月 8 日，在現任社長丹斯里張曉卿及高層的努力爭取之下，《星洲日報》

80 年代の華字紙業界は全体で 180 万人程度の読者数に対し、マレー半島部では 8 紙の日刊紙がしのぎを削る状況にあった［伊賀 2010: 41, The Star, March 30, 1990］。90 年代になると競争はさらに激化し、マレー半島部では 5 紙の日刊華字紙が生き残ったが、光華日報が発行されるペナンは別として、最終的には『星洲日報』を擁するグループと、『南洋商報』を擁するグループに収斂され二大メディアグループの時代が続いた。現在、『星洲日報』は『南洋商報』を含む国内の日刊華字紙を買収し、マレーシア国内のみならずグローバルな華人社会における一大メディア企業「世界華文媒体有限公司（Media Chinese International Ltd.）」としての地位を獲得するに至る[5]。2009 年時点における『星洲日報』の発行部数は約 40 万部で、『星洲日報』のウェブページによるとその推定読者数（readership）は 118 万人で、中国（香港を含む）・台湾で発行される新聞を除けば、『星洲日報』は世界最大規模を誇る日刊華字紙である[6]。

今日、『星洲日報』は『南洋商報』と並び、マレーシア華人社会におけるリーディングニュースペーパーの地位を確立している。その他、国内で発行部数の多い有力華字紙には『中国報』や『光明日報』などもあるが、『光明日報』は華人人口の多いペナン地域において発行される地方紙であり、『中国報』についてもローカル記事の掲載割合が比較的多い華字紙という位置づけである。

以上ここまで概観してきたように、『星洲日報』は企業家の事業促進と祖国中国と南洋華僑社会の橋渡し的な慈善事業として開始した。独立後のマレーシアにおいては、マレー人を優遇する民族的政策が実施されていく過程で当然のことながら生じる華人の不満や不安を拾い上げ伝達する「公共的メディア」［伊賀 2010］としての役割を強化していく。このようにして、華字紙は、英字紙やマレー語新聞が政府の広報メディア化していく過程とは対照的に、激しい競争にさらされながら独立メディアとして機能し続けたのである。このような経緯に鑑みれば、次節以降でみていくように、独立期以降の『星洲日報』がいかにして市井の人々の声を救い上げるエスニック・メディアとしての役割を華人社会において担うようになっていったのかは明らかであろう。

1.3　調査の概要

さて、次節に移る前に調査の概要に触れておきたい。本研究を行うにあたり、ひとまず

得以復刊）。

[5] 張暁卿は新聞業においてもグローバルな展開を進め、1996 年に香港の華字紙『明報』を買収、パプア・ニューギニアで英字紙 National を経営し、雑誌『亞洲週刊』も傘下に収めている。またカンボジアや、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ等においては『星島日報』（Sing Tao Daily）を発行している［伊賀 2010: 55］。

[6] また『星洲日報』はマレーシア国内においても最大規模の日刊華字紙である。部数監査機構（Audit Bureau of Circulation）によると、『星洲日報』は華人人口比率の高いスランゴール州、クアラルンプール特別行政区、ジョホール州の順に多く流通しており、首都圏（Klang Valley）での購読が流通地域全体の 4 割をしめる［The Star, December 6, 2007］。

2008 年および 2009 年に収集した告知広告記事のデータと分析結果を参考にし、作業仮説をたてることにした。2008 年、2009 年に収集した各 1 ヶ月分[7]の告知広告記事の総数を集計した結果、告知広告記事の多くは圧倒的に「死に関するもの」が多く、それらが全体の約 9 割を占めることが明らかとなった（表 1 参照）［櫻田 2009］。

表 1：2008 年・2009 年における告知広告記事の内訳

	記事総数	死に関するもの	その他
2008 年	388	337（86.8%）	51（13.1%）
2009 年	427	385（90.1%）	42（9.8%）
合計	815	722	93

（出典）［櫻田 2009：83］

この傾向は 2010 年以降においても同様で、例えば 2012 年の場合、家族の死を通知し葬儀を案内する告知広告記事「訃告」が占める割合は、全体の 40%も占めるようになっていた。ここから、本研究を開始する際に「マレーシア華人社会は『死』という節目に描く社会関係に高い関心を示す社会」であるという作業仮説を立てることにし、2000 年代以前においても死に関する記事、つまり「訃告」や「挽詞」などの葬儀案内や弔意記事が数多く掲載されていたと仮定し、マレーシア華人社会の死に対する社会通念の変遷を明らかにすることを目的とし、2000 年代以前の資料を収集することにした。

2009 年の研究では、主にインフォーマント家庭に保存されていた『星洲日報』に掲載された告知広告記事を収集したが、今回の調査ではマレーシア国立図書館（*Perpustakaan Negara Malaysia*）とシンガポール国立図書館（*National Library of Singapore*）に収蔵された『星洲日報』のマイクロフィルムの調査と、調査地のインフォーマント家庭に保管されていた『星洲日報』の調査を実施し、1929 年から 2012 年までの間に掲載された告知広告記事 11 か月分を抽出した[8]。抽出したのは 1929 年 1 月 15 日から 2 月 16 日の 1 ヶ月間、1935 年、1941 年、1950 年、1960 年、1970 年、1968 年、1970 年、1980 年、1990 年、2002 年、2012 年の各 1 月の 1 ヶ月間に『星洲日報』に掲載された告知広告記事である[9]。

---

[7] 収集期間は、2008 年 2 月 1 日～29 日までの 1 ヶ月間と、2009 年 1 月 15 日～2 月 19 日までの約 1 ヶ月間である。

[8] これらの告知広告記事の収集は 2012 年 1 月 4 日～8 日、1 月 21 日～31 日、2 月 21 日～26 日までの期間に実施した。

[9] 収集した年代にばらつきがあるのは、当初マレーシア国立図書館から調査を開始したためである。マレーシア国立図書館には 1968 年以降のマイクロフィルムが収蔵されていたため、それ以前のマイクロフィルムについては 2 月 21 日以降にシンガポール国立図書館において確認した。またシンガポール国立図書館調査時に確認した 1940 年のマイクロフィルム・リールがなかったため（1939 年 12 月 22 日から 1940 年 2 月 19 日までのリールが存在しなかった）、1941 年で代用することにした。同様にマレーシア国立図書館で調査した際には、2000 年 1 月分のマイクロフィルム・リールが部分的に紛失していたため（2000 年 1 月 20 日以降が紛失）、2002 年で代用した。

2.　マレーシアのメディア

2.1　新聞のある風景

すでに前節において『星洲日報』の歴史的経緯については概観したが、ここでは華字紙における告知広告記事の特徴を示すために、今日におけるマレーシアの新聞業界の状況と『星洲日報』について簡単に概観したい。

マレーシアの部数監査機構（Audit Bureau of Circulation）によると、2005 年 7 月 1 日から 2006 年 6 月 30 日までのマレーシア国内における新聞発行部数は 280 万部で、前年期の 2004 年 7 月 1 日から 2007 年 6 月 30 日から約 12%増加したという［The Star, December 6, 2007］。マレー人、華人、インド系マレーシア人等の民族集団から構成される多民族国家マレーシアでは、それぞれの言語で発行される新聞が身近な情報源として大きなインパクトを持っている。衛星放送やインターネットなどのデジタルメディアの普及により、紙媒体による新聞や書籍などの伝統的メディアが世界的に低調な状況にある中で、マレーシアの新聞発行部数の増加は新聞というメディアが堅調な状況にあることを示すひとつの証左といえるだろう［櫻田 2009: 82］。衛星放送が香港や台湾などの情報番組を放送し、インターネットを通じて最新のニュースに触れることができるこの時代において、新聞が好んで読まれるのはなぜだろうか。

華字紙はテレビに比べると、より華人の日常生活に根差したメディアであるといえるだろう。例えば、ある華人が多く暮らすコミュニティの朝市では、野菜や精肉類、饅頭や焼きそばなどの小食を販売する屋台が並ぶ。そこには新聞売りも小さな机で屋台を出すのが一般的である。小路を往く人々は買い物のついでに新聞を購入し、コピティアムと呼ばれる珈琲店で簡単な朝食と甘いコーヒーや茶を飲みながら新聞のページを繰る。日中は会館、寺廟、自宅のテラスなど様々な場所で新聞を読む人々の姿がみられる。夜ともなれば、混み合う屋台街や食堂で「夜報」と呼ばれる華字紙夕刊（早刷り版）を売り歩く販売員が狭い通路を行き交い、人々は夜報の最新ニュースを読みながら食事をする。このようにマレーシア華人の日常に根差したメディアである新聞は、世界中に広がる華人コミュニティの現在を即座に伝える衛星放送のテレビプログラムと比べると、より狭い範囲の情報を伝えるメディアに過ぎない。しかしながら、新聞にはアクセスしやすい手ごろな価格と、身近なコミュニティに関する具体的な情報を得ることができるという 2 つの利点がある。

新聞の価格の安さは衛星放送と比較してみると明らかだろう。現在、マレーシア華人家庭の多くが衛星放送の視聴契約を結んでいる。これはマレーシアの地上波放送がマレー人を主な視聴者として想定してきたことと関係する。2004 年、2006 年に新規民営地上波放送局が参入するまでマレーシアの地上波放送局は国営放送 2 局（TV1 と TV2）と民営放送 2 局（TV3 と ntv7）のみに限られており、TV2、TV3、ntv7 などは時間帯により多言語プログラム（マレー語・標準中国語・広東語・英語・タミル語によるニュース番組や台湾・香港、欧米の番組など）が放送されてはいるが、他の言語放送との兼ね合いから標準中国語

や広東語による番組割合はそこまで高くないのが現状である。しかし衛星放送であれば慣れ親しんだ言語で一日中様々なプログラムを視聴することが可能となる。実際、1996 年から衛星放送配信事業を展開するアストロ（Astro Holding Sdn. Bhd）の世帯契約率は現在 50%を超えるほど好調であるという。

153 チャンネルを有するアストロの視聴契約のパッケージ商品には様々な価格帯があるが、最もシンプルかつ安価なパッケージは、国営放送や民営放送の地上波放送とアストロが制作した放送などの 38 チャンネルが視聴できる基本プラン（Family）と 4 つのプラン（ニュース[10]、児童、教養、バラエティ）から 3 つを選ぶパッケージ商品で、このパッケージの 1 ヶ月の視聴料金は約 1,644 円（RM 60.95）[11]である。同様に基本プラン Family に標準中国語、広東語、福建語放送を放映する放送局（香港 TVB の番組を放送するアストロ華麗台、香港 TVB の星河頻道、鳳凰衛視、台湾 TVBS、シンガポールの番組を放送するアストロ AEC など）のプログラムが視聴できる Dynasty プランを加算したパッケージの 1 ヶ月の視聴料は約 2,158 円（RM 79.95）である。衛星放送は香港や台湾の番組のリアルタイム視聴を可能にする一方で視聴料は安くはなく、また世帯ごとの契約が必要であり視聴料金は個人が負担しなければならない。一方の新聞価格は 1 部あたり約 27 円（RM1.00）から 35 円（RM 1.30）程度で、『星洲日報』の場合 1 ヶ月購入したとしても約 1,088 円（RM40.30）と衛星放送と比較した場合、比較的安価であるといえる。また新聞は世帯での閲読に限定されない。新聞は持ち運び可能であるため世帯から外へ持ち出されて回覧されることもしばしばである。日本のように月極め料金を支払い自宅に配達してもらうというサービスはないため、状況に応じて購入することやめることの選択も可能である。自分が購入することもあれば、時には職場で、コピティアムで、会館で誰かが購入した新聞を読むということもある。すでに言及したが 2009 年時点における『星洲日報』の発行部数は 40 万部であるが、推定読者数は 118 万人であり、1 部の新聞は 3 人によって閲読されていることが推定される。

約 35 円で購入できる『星洲日報』は「国内」、「国際」、「財形」、「体育」、「娯楽」、「評論」、「地方」、「副刊」、「分類」などから構成され、全体で 100 頁あまりの紙面から構成される[12]。紙面に挟み込まれる「地方」版は発行されるエリアごとにエディションが異なり、「北馬（ペナンを含むマレー半島北部）」、「霹靂（ペラ）」、「大都会・雪隆（クアラルンプール・スランゴールなどの首都圏）、「森美蘭（ヌグリ・スンビラン）」、「馬六甲（マラッカ）」、「柔仏

---

[10] ニュースプランでは、BBC World, CNN, Al Jazeera English, CNBC Asia, Bloomberg, Australia Network の放送が視聴できる。

[11] リンギット（RM）はマレーシアの通貨単位で、2012 年 4 月 2 日時点で 1 リンギットは 27.232 円である。ここ数年は 25 円から 32 円前後を推移しているが、便宜上本稿では 1 リンギットを 27 円で概算している。

[12] 新聞には国内外のニュース記事はもちろんのこと、文学作品やオピニオン記事、最新のファッション記事、電化製品を詳細にレポートするセクションなどもあるため、雑誌のような読み応えがある。

（ジョホール）」、「東海岸（マレー半島東海岸）」、「砂労越・沙巴（サラワク・サバ）」の 8 地域に区分される。これらの地方欄にはそれぞれの地域ならではのローカルニュースや歴史、風習、事件事故、衛生問題、犯罪案件などの社会問題に関する取材記事が掲載される一方、極めて個人的な記事である告知広告記事が掲載される。告知広告記事は、企業などが宣伝活動の一環として掲載する広告（advertisement）とは異なり、個人や企業、社会組織などが主体となって新聞社に掲載料を支払い掲載される記事である。つまり、ここでいう告知広告記事とは、商業的な情報伝播活動というよりは、個人の社会関係の範疇に対する告知を目的とし掲載される極めて個人的なものであるといえる。

2.2　告知広告記事とはなにか

マレーシア研究においてメディアを研究対象とし華人社会を分析する研究はさほど多くはないが、鋭い視点から新聞とマレーシア華人社会について論じた研究も少なからず存在する［i.e. 陳 2008(1967), 卓(編) 1980, 伊賀 2010］。しかし、華字紙に掲載される個人的情報が掲載される告知広告記事を研究対象とする研究となると皆無に等しい。しかしながら、連日、華字紙には数多くの告知広告記事が掲載され、そのインパクトは無視することはできないほど大きいといえる。例えば、2012 年 1 月 1 日から 31 日までの約 1 ヶ月間（確認できたのは 27 日間）の『星洲日報』（ジョホール版）に掲載された告知広告記事の総数は 679 件で、1 日につき約 25 件の告知広告記事が掲載されたことになる。

本研究では、このように紙面上一定の存在感を持つ「告知広告記事」を「個人や団体の広告・告知を目的とし掲載依頼者が料金を支払うことにより掲載される記事」とさしあたり定義したい。告知広告記事のバリエーションは多岐に渡るため簡潔に分類することは困難であるが、本稿では暫定的に以下のように 9 つのカテゴリーに分類した。

1. **「訃告」**: 葬儀案内を兼ねた死亡告知広告記事
2. **「挽詞」**: 死者が生前に所属していた社会組織により掲載される追悼記事
3. **「泣謝」**: 遺族による葬列参加に対する謝意を表明する記事
4. **「訃告更生」**: 一度掲載した訃告記事の記載事項を訂正する記事
5. **「年忌供養」**: 故人の年回法要を告げる記事
6. **「結婚祝賀」**: 結婚を祝う記事
7. **「栄誉称号祝賀」**: 州王による称号賦与や学位取得昇進等を祝う記事
8. **「開店祝賀」**: 新事業・新店舗の開業を祝う記事
9. **「通知」**: その他、親子・兄弟・夫婦関係などの終焉を公にする記事「脱離関係」、謝罪記事「道歉」、同居の開始を報告する「同居告知」、退職を報告する「離職通告」、祝賀記事の掲載に対する謝意や結婚披露宴への出席に謝意を表明する「鳴謝」などの雑多な記事群

また、特に「挽詞」に関しては、誰が掲載を依頼したのかという観点からさらに以下の 4

つに分類した。

2-1　**挽詞（個人）**：家族、親族、友人、同僚などの個人の名前で掲載された挽詞

2-2　**挽詞（団体）**：同郷会館、学校、政党などの社会組織の名前で掲載された挽詞

2-3　**挽詞（企業）**：商店、食堂、企業などの名称で掲載された挽詞

2-4　**挽詞（混合）**：個人、団体、企業名称が混在し掲載された挽詞

『星洲日報』ウェブページの広告価格表 2012 を確認すると、告知広告記事は、〈商業広告〉と〈非商業広告〉に分類されている。非商業広告には賀詞（greetings）、挽詞（condolence）、訃告（obituary）、人事広告が含まれ、商業広告には通告（notice）、鳴謝（thank you）などの記事が含まれる。しかしここではこの分類には従わず、前述したように 2008 年、2009 年の研究に基づき、〈死に関するもの〉と〈その他〉に暫定的に分類した（表 2 参照）。

表 2：告知広告記事の分類

告知広告記事

〈死に関するもの〉	〈その他〉
訃告	結婚祝賀
挽詞（個人）	栄誉祝賀
挽詞（団体）	開店祝賀
挽詞（企業）	通知
挽詞（混合）	
泣謝	
訃告更生	
年忌供養	

時代により告知広告記事の掲載価格は変更されるが、2011 年 12 月 1 日から現在まで適用されている地方版広告価格を参照すると、非商業広告の基本料金は全国版で 1,325 円（RM53）、ジョホール版は 475 円（RM19）で、カラー仕上げを希望する場合、26.5cm×53cm の半面大の大きさで 65,000 円（RM2600）が加算される。それでは以下の節で具体的な告知広告記事について概観したい。

3.　告知広告記事の変遷

3.1　通知

まず概観したいのは雑多な記事群をまとめた通知記事である。通知記事には、社会関係の終焉を公にする「脱離関係」、謝罪記事「道歉」、同居の開始を報告する「同居告知」、退職を報告する「離職通告」、祝賀記事の掲載に対する謝意や結婚披露宴への出席に謝意を表

明する「鳴謝」などがある。まず夫婦関係の終焉を告知する脱離関係告知記事を概観したい。

脱離関係

本人何○○ Ho ……（I/C No. ……）與陳○○ Tan ……（I/C No. ……）在 2002 年 6 月 2 日以華人風俗結婚、原因双方意見不合、難偕白首、由即日起脱離関係、今後男婚女嫁、互不干渉、謹此敬告親友們。

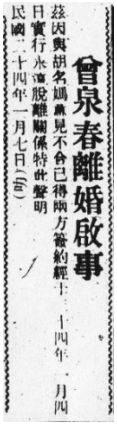
○○（地名）：何○○

17-2-2008

この記事は 2008 年 2 月 17 日に『星洲日報』ジョホール版に掲載されたものである[13]。記事は「脱離関係」という文言に始まり、2002 年 6 月 2 日に結婚した妻（何 Ho 氏）と夫（陳 Tan 氏）が意見の不一致を理由に（原因双方意見不合）離婚するとある。以下、この記事が掲載された 2008 年 2 月 17 日をもってその関係を終了することとし（由即日起脱離関係）、夫婦は今後一切無関係であること（今後男婚女嫁、互不干渉）が友人たちに告げられている。この記事の掲載依頼者は、妻（何氏）であることが広告記事下部右端の記載から分かる。また夫妻それぞれの姓名に続いて身分証明証番号が記載されているが（I/C No. ……）、2000 年代以降の脱離関係記事、謝罪記事、退職告知記事などにはこのように身分証明証番号が付記されるのが一般的である。脱離関係記事で多いのは親子関係、兄弟関係などの縁を切ることを宣言するものだが、筆者が長年調査を行ってきた地域のインフォーマントによれば、このような記事が掲載される原因に借金問題が関係しているようだ。身分証明証番号の付記は、昨今深刻な社会問題となっている貸金業（ローンシャーク Ah Long）による暴力的返済を迫る行為を憂慮するためなのだろうか。暴力の範囲が自分に及ぶことを恐れて、あるいは返済の義務を回避するために問題の当事者である者と縁を切るということなのかもしれない。

2000 年代の離脱関係記事はここで概観したものが一般的であるが、かつての離脱関係記事はいったいどのようなものだったのだろうか。まず 1935 年 1 月 8 日に掲載された離婚告知記事をみてみることにしよう（写真 5 参照）。

[13] 姓名を示す下線は筆者が引いた。


曾泉春離婚啟事

茲因與胡名媽意見不合已得雙方簽約經十二十四年一月四日實行永遠脫離關係特此聲明

民國二十四年一月七日(明)

写真 5：離婚告知記事

（1935 年 1 月 8 日）

1935 年 1 月 8 日に掲載された離婚告知記事には、曾泉春なる人物の離婚を知らせるとある。こちらにもやはり意見の不一致が理由として挙げられており、1934 年 1 月 4 日に関係を終了した（脱離関係）ことを伝えると記載されている。身分証明証の番号記載はさすがに無いものの、先に見た 2008 年の脱離関係記事の形式とほぼ同じであることが分かるだろう。

3.2　栄誉祝賀

さて次に栄誉祝賀記事をみてみたい。栄誉祝賀記事は 1929 年、1935 年にはみられなかったが、1941 年以降は一定の数が確認できる（表 3 参照）。

表 3：栄誉祝賀の掲載数の変遷

1929 年	1935 年	1941 年	1950 年	1960 年	1968 年	1970 年	1980 年	1990 年	2002 年	2012 年
0	0	10	6	27	52	47	20	9	7	49

柔佛州太平局紳
官珍生先生榮獲 英皇頒賜殖民地
警察勳章之慶

吾僑之光

昔加末

客屬公會
廣西同鄉會
珈琲公司會
桃源俱樂部
彰化銀行
何蕭良行
林學通行
羅民生
林尚存
羅谷三
葉飲生
黃忠興
林峻瑞
唐柏垣
楊陸雨農
張榮典
范元安
利安
怡珍金號
海通公司
三和公司
東南茶室
聯安茶室
天然茶室
岑業良行分
瑞昌
巫宮
新欧州大酒店

（余文打）

什加片無雞丁雞丁
愛華學校
何榮泰
何賢
彰丹恩
彰俊
奉春
傳泰
彰成
黃桃
華合
廣福
馬財
彰新
大興
天聖
公司

同敬賀

写真 6：栄誉祝賀記事
（1950 年 1 月 11 日）

写真 6 は、1950 年 1 月 11 日に掲載された栄誉祝賀記事で、ジョホール州の治安判事（太平局紳・Justice of the Peace）である官珍生氏が英領植民地警察勲章を受勲したことを祝う記事である。この記事に限らず、多くの栄誉祝賀記事では、称号を受けた本人と関わりがある個人や社会組織が掲載依頼者となることに注意する必要がある。この記事の場合も、客家公会、広西同郷会、珈琲公司会、桃源倶楽部などの同郷、同業団体などの社会組織や、東南茶室、新欧州大酒店、愛華学校などの商店や学校、企業、個人が連名で掲載したものであることが分かる。記事中央には大きく「吾僑之光（我々華僑の光）」と記されており、ある人物が栄誉称号を付与されるという事実が、掲載依頼者たちにとっても喜ばしい事であることが示されていることが分かる。つまり、栄誉祝賀記事とは名誉ある勲章をもらった人物と〈我々〉という祝う側の人間の社会関係を紙上で表明すること、つながりを生み出す機会ともみなすことが出来るだろう。

さて次に 2012 年の栄誉祝賀記事を見たい。下に示した二つの写真は 2012 年 1 月 1 日、および 1 月 8 日に掲載されたスルタンによる称号授与についての栄誉祝賀記事である（写真 7・8 参照）。

写真 7：栄誉祝賀記事

（2012 年 1 月 8 日）

写真 8：栄誉祝賀記事

（2012 年 1 月 1 日）

至誠恭賀という言葉に始まるこれらの記事は、どちらも栄誉あるダト（*Dato'*）の勲章を得たことを知らせるものである。マレーシアでは、現在でもマラッカ王朝時代の階級付与の慣わしが残り、社会的貢献が認められた人物には国王や州王スルタンの誕生日の式典に

際して称号が与えられる。ダトは州王スルタンより付与される称号のひとつである[14]。

写真 7 の記事からは陳天賜氏が、写真 8 の記事からは陳俊豪氏が、ダトの称号授与されたことが分かる。彼らはパハン州のスルタン、ハッジ・アハマッド・シャー（Sultan Haji Ahmad Shah Al-Mustain Billah ibni Almarhum Sultan Sir Abu Bakar Riayatuddin Al-Muadzam Shah）の 80 歳の誕生日に際してダトの称号を授与されている。記事にはその際の写真がそれぞれ 2 枚掲載されている。一つは授与の瞬間を写した写真で、もう一つは授与後の妻と共に撮影された写真である。ダトの称号は一代限りで世襲されないが、夫が授与された場合、その瞬間からその妻はダティン（*Datin*）の称号を名乗ることができるようになる。つまり夫婦の写真を掲載することで、ダトの称号を授与された夫だけではなく、ダティンとなったその妻の社会的称号獲得を周知し、それも併せて祝賀するものであることが分かる。写真 8 の陳俊豪氏の記事に記載された妻の名前には、すでにダティン（拿汀）の称号が記載されており、夫の称号授与と同時に彼女も新たに称号を獲得したことが示されている。

現代の栄誉祝賀記事は、見かけこそ違うが 1950 年の形式とほぼ同様であることが分かる。特に写真 7 の記事は、祝われる当事者である陳氏が所属する社会組織（会社）が掲載依頼主となっている点で 1950 年の記事とほぼ同じと見なせるだろう。一方、写真 8 の陳俊豪氏の栄誉祝賀記事はこのスタイルをとっていないことに注意する必要がある。彼の場合、社会組織ではなく彼の家族の親族名称と名前が記載されていることから、この記事の掲載依頼者は称号を授与された男性の親族が中心となって掲載したことが分かる。記事の下半分左側には陳氏の両親、妻、子ども、キョウダイとその配偶者、右側には妻のキョウダイとその配偶者、外孫などの父系に限らない親族が書き記されている。

企業のトップ、あるいは家族親族の社会的功績を新聞紙上で広く告知することは掲載依頼者にとっての誉れともなる。それは先に示した 1950 年代の栄誉祝賀記事における人間関係のあり方とさほど変わらないといえるだろう。しかし、栄誉称号を付与された人とのつながりを表明することにより利益が引き出させる関係が社会組織から家族へとシフトしつつあるという点と、誰が華人に社会的称号を授与しているのかという統治者の変化については注意する必要があるだろう。1950 年代に華人に社会的地位を付与したのは英植民地政府であり、2010 年代以降掲載が増加するのはマレーシアという多民族国家を統治する国王や国王に就任する可能性のある各州のスルタンである。海峡植民地時代から統治者は移り変わったが、華人は常に称号を授与される立場であり続けたことがここに看取できる。もうひとつ興味深いのは、写真 7・8 で示した記事の写真にはマレー風の衣装を着用した当人の姿があるという点だ。一般的に、華人がマレー系の民族衣装を日常的に着用することはほとんどない[15]。従ってこのようにマレー系の民族衣装を着用しスルタンから名誉称号を授

---

[14] ダトッ（*Datuk*）は、国王、ペナン、マラッカ、サバ、サラワク州のスルタンによって付与される称号で、ダト（*Dato*）はそれ以外の 9 つの州のスルタンより付与される称号である。

[15] 公職に就く者の中には、決められた勤務日にマレー系の民族衣装かそれに準じるものの着用

与したという事実を紙上で告知することは、華人社会にはとどまらないマレー人社会への接近の可能性を示し、そのビジネスチャンスを拡大する関係性構築的行為とみなせるかもしれない。このように、今日の栄誉祝賀記事からはしなやかに生きるマレーシア華人の姿が看取できるが、形式的変容はさほど確認されなかった。

さて、次にある女子中学生の全国試験における優秀な成績を称える記事をみてみよう。

至誠祝賀

○○（地名）：○○補習中心院長

李○○博士令千金

何○○同学

PMR 考試考獲 6A2B 佳績

品学兼優

○○（地名）／柔仏：○○補習中心

全体老師 敬賀

*考獲 2B 科目：歴史、華文／4 科課内指定作業成績優異

これは 2012 年 1 月 15 日に『星洲日報』ジョホール版に掲載された栄誉祝賀記事である。記事は、ジョホール州のある学習塾（○○補習中心）の院長である女性（李氏）の娘（何氏）が中等学校の全国統一試験（PMR 考試）[16]で好成績を収めたことを報告するものである。記事には院長の娘の顔写真も掲載され、優雅な書体で「品学兼優」の文字が添えられている。この記事が興味深いのは、掲載依頼主が成績優秀かつ美貌の娘を自慢したい母親（塾院長）なのではなく、この学習塾の教師たちであった点にあるだろう。この記事の最終行には、6A2B といういささか凡庸な成績ながら佳績として祝賀記事を乗せたことへの言い訳めいた一文が記載されている。ここから、この記事は単に成績優秀な学生を称えるために掲載されたわけではなく、学習塾で働く教師たちが上司である「院長」に対して気をまわして掲載したものであるらしいことが読み取れる。

このように、栄誉祝賀記事からは、記載されている出来事以上の人間関係の断片を読み

が義務付けられている場合もある。

[16] この試験は毎年 10 月第 1 週あるいは第 2 週に行われる Penilaian Menengah Rendah (Lower Secondary Assessment)と称される全国試験である。受験対象者は、Form 3 と呼ばれるセカンダリースクールの第 3 学年（中学 3 年生）で、受験科目はマレー語、英語、数学、科学、地理、歴史、生活科目（*kemahiran Hidup*）で、ムスリム学生にはイスラム研究（Islamic Studies）の受験が義務付けられている。その他にアラビア語、アラビア語基本会話、中国語、先住民の言語であるイバン語、カダザン-ドゥスン語、パンジャビ語、タミル語を選択することができる。試験結果は 12 月下旬にそれぞれの学校を通じて通知される。成績は A から E（落第）で評価され、この成績と個人の希望に基づき残りの 2 年間でどの専門に進むかが決定される。

取ることができる。おべっか、お世辞、コネ作りといった人々のしたたかな戦略や意図を看取することもできる。それはすでに概観した写真 7 のような名称称号授与にも同様である。これらの記事には、栄誉称号が授与されたことは告知されるが、どのような社会貢献・事業に対してこの称号が付与されたのかという点は記載されることがない点に注意する必要がある。

このような記事は、表彰の具体的内容や対象となる社会貢献や業績よりも、「表彰されたという事実」と「名誉称号を受賞した人物と関わりがある人の名前」を記載すること、つまり利益を引き出すことのできる関係の範囲を公に宣言することこそが重視されている可能性がある。

3.3　結婚祝賀

さて次に結婚を祝う結婚祝賀記事について概観したい。結婚祝賀としているが、ここにはあまり数が多くなかった結婚報告、婚約報告などの結婚に関する記事も含む。

結婚祝賀記事は､創刊日である 1929 年 1 月 15 日から掲載が確認できる記事である｡1929 年に掲載された告知広告記事における結婚祝賀記事の割合は 16.9%で、当時の記事が他に「泣謝」「開店祝賀」退職通知、離婚通知等の「その他」しかなかったことに鑑みると、結婚祝賀記事は告知広告記事における主要なものであったことが推察できる。

表 4 は年代ごとの結婚祝賀記事の掲載数を示したものである。先にみた栄誉祝賀記事の場合（表 3)、古い年代には掲載数が少なかったという傾向があったが、結婚祝賀記事の場合、新しい年代になるにつれ掲載数が少なくなるという傾向がみられる。1935 年、1941 年は 1 ヶ月間に 300 件以上の掲載があった結婚祝賀記事は、独立前後も 150 以上の掲載を維持するが、2000 年代に入ると突然一桁台に激減する。掲載数の割合の変遷は、図 1 に示したようにきれいな右肩下がりを描いている。なぜ結婚祝賀記事の掲載は減少したのだろうか。まずいくつかの結婚祝賀記事を具体的に概観した上で、この傾向について考えてみたい。

表 4：結婚祝賀記事の掲載数の変遷

1929 年	1935 年	1941 年	1950 年	1960 年	1968 年	1970 年	1980 年	1990 年	2002 年	2012 年
64	322	352	62	175	168	169	35	21	4	2

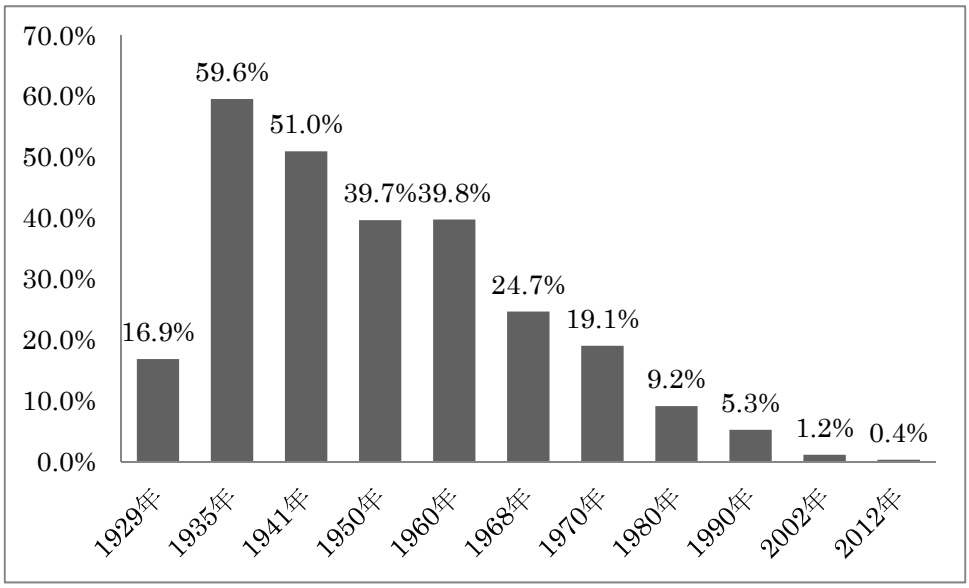


図 1：結婚祝賀記事の掲載数の年代別割合

写真 9：結婚祝賀記事

（1929 年 1 月 19 日）

写真 9 は 1929 年 1 月 19 日に掲載された結婚祝賀記事である。4 つの記事が並んでいるが、真ん中の二つは同一の夫婦に対し異なる個人が掲載した記事である。左端の記事は羅氏の息子である文氏の結婚を祝う記事となっている。記事を掲載しているのは胡氏で、それ以上のことは記事からは読み取れない。残りの三つの記事は○○夫婦の息子さんと○○さんの娘さんが結婚するという記載のされかたで、知り合い夫婦の子弟の結婚を個人が祝う形式になっている。どの記事にも中央には「愛情神聖」「愛情永固」といった文言が配置されている。

星洲日報

百年好合

宜其室家

愛的結合

相敬如賓

琴瑟友之

宜其室家

天作之合

幸福无量

茶陽會館民國廿四年度職員表

同聲俱樂部民國廿四年度職員表

鳴謝啓事

吉隆坡雪蘭莪船建會館常年大會通告

写真 10：結婚祝賀記事

（1935 年 1 月 8 日）

写真 10 は 1935 年に掲載された結婚祝賀記事である。基本的な形式は 1929 年のものとほぼ同じである。記事の冒頭に結婚するのが誰の息子・娘であるかを記し、中央に祝いの言葉を配置している。下部にその記事を掲載した者の名前を記載している。

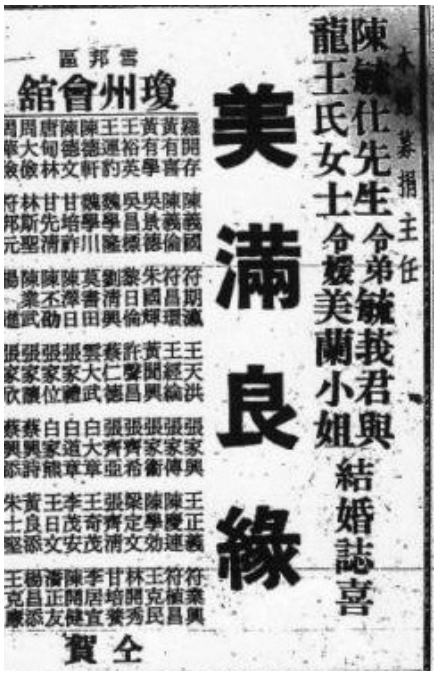

本紙募捐主任
陳毓仕先生令弟毓莪君與
龍王氏女士令媛美蘭小姐結婚誌喜
美滿良緣
雪邦區
瓊州會館
全賀

写真 11：結婚祝賀記事
（1970 年 1 月 4 日）

写真 11 は 1970 年の結婚祝賀記事である。この記事の形式も 1929 年、1935 年のものとほぼ同様であるが、異なるのは掲載依頼者の名前が格段に増えていることであろう。この結婚祝賀記事は、新郎の父あるいは兄の傍輩らが掲載を依頼したものである。左上の記事は、中国海南島出身者の互助組織である瓊州（ぎょうしゅう）会館の主任を務める陳氏の弟、毓氏の結婚を会館の成員が祝うものである。

以上のように 1929 年から 1970 年までの記事をみる限り、結婚祝賀記事で結婚を祝う主体は結婚する夫婦の父や兄などと社会関係を取り結ぶ非血縁者であることが分かる。しかし 2012 年に掲載された結婚祝賀記事を概観すると、この傾向が変化しつつあることが分かる。

写真 12：結婚祝賀記事

（2012 年 1 月 10 日）

写真 12 は 2012 年に掲載された記事であるが、この記事は結婚式当日に新郎の両親が結婚式の挙行を告知するものである。ただし、この記事は結婚式を周知する目的で掲載されたのではなく「長男が結婚した」という事実を報告する意味合いが強い。注意すべきは、ここにはこれまでみてきたような当事者である長男の両親や長男夫婦を中心とした社会関係が記載されていないという点である。記事の主役は美しい結婚衣装をまとった新婚夫婦を中心とする〈家族〉であり、1929 年～1970 年の結婚祝賀記事に確認できた新婚夫婦をとりまく男性中心の社会関係はほとんどみられない。つまり、先にみた栄誉祝賀記事において重視される関係が、社会組織から家族へと関係性が変化したように、結婚祝賀記事の重心も社会組織から家族へと変化していたのである。このような社会関係の変化がより端的に表れているのが次にみる〈死に関する記事〉である。

3.4　死に関する記事

表 5 は、訃告、挽詞、泣謝、訃告更生、年忌供養の掲載数を合算した〈死に関する記事〉と「訃告」の掲載数及び全体に占める割合を年代ごとに示したものである。先にみた結婚祝賀記事の場合、新しい年代になるにつれ掲載数が少なくなるという傾向がみられたが、死に関する記事の場合はその逆で、1929 年、1935 年は 1 桁台だった掲載割合が、40 年代以降は 30%台を推移し、80 年代になると半数を超え、2000 年代以降は 80%以上となって

いる。掲載数の全体に占める割合は、図 2 で示した通り右肩上がりで増加しており、図 1 の結婚祝賀記事とは極めて対照的である。また訃告の掲載数と掲載割合も表 5 に示したが、こちらも年代が新しくなるにつれその数が増加していることが分かる。

表 5：死に関する記事と訃告の掲載数と全体に占める割合の変遷

	1929	1935	1941	1950	1960	1968	1970	1980	1990	2002	2012
記事総数	377	540	689	161	439	678	884	380	393	322	459
死に関する記事	3	43	201	28	95	197	274	195	229	273	375
	1%	7%	29%	17%	22%	29%	31%	51%	58%	85%	82%
訃告	0	6	14	8	6	20	27	28	42	71	184
	0%	1%	2%	5%	1%	3%	3%	7%	11%	22%	40%

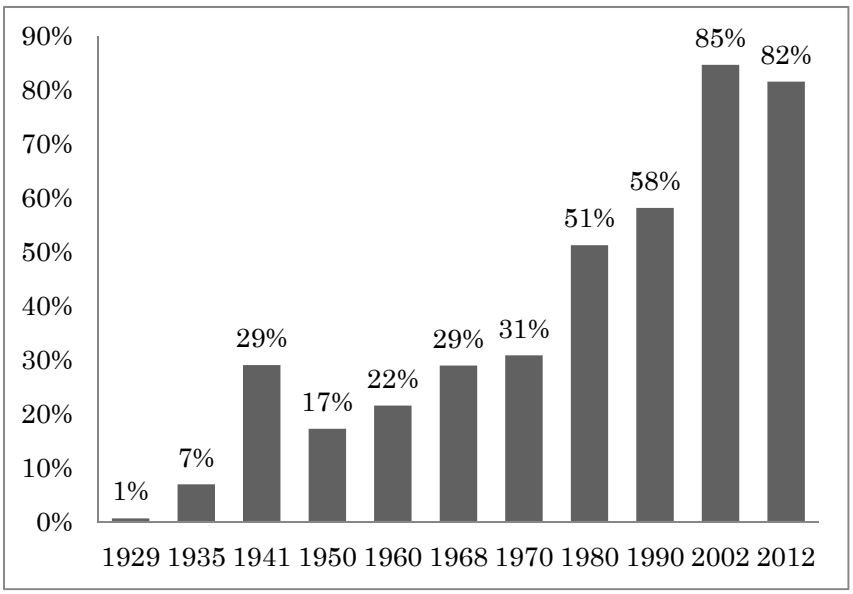


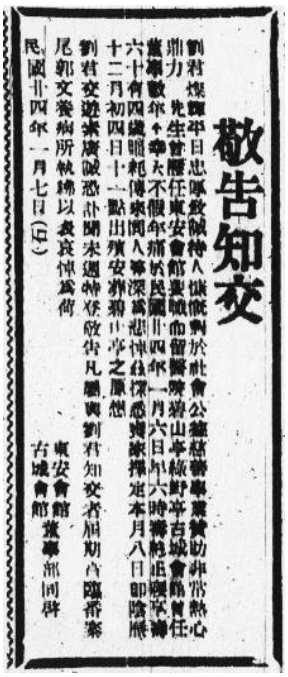
図 2：死に関する記事の掲載数の年代別割合

すでに 1.3 で述べたように、告知広告記事の収集作業を開始する前は過去においても死に関する記事の掲載率が高いだろうと想定していたが、調査を実施していく中でこの見込みはもろくも崩れることとなった。図 2 をみれば一目瞭然ではあるが、死に関する記事が 8 割を占めるいまの状況は 2000 年代以降の極めて新しい潮流であり、掲載率が半数以上になるのも 1980 年代以降である。つまり、マレーシア華人社会において死という節目に掲載される告知広告記事に強い社会的関心が集まるという傾向は極めて現代的な現象であることが明らかとなった。この点については、訃告と挽詞の事例を概観した後に、あらためて考察する。

3.4.1　訃告

死に関する記事は多岐に渡るが、2000 年代以降半数以上を占めるのは訃告と称される「新聞に掲載される葬儀・告別式の案内通知」［上水流 2004: 44］である。訃告（訃聞）は、かつては故人の近親者により親族や親友に直接届けられていたという［鈴木 1995(1934): 218］。新聞に掲載される訃告は台湾には存在するが、今日の中国では見かけられないという。しかし 19 世紀末の中国では存在したようである。当時の中国を調査したデ・ホロートによると「中国ではたくさんの男性子孫をもつことは尊ばれるので、訃聞に多くの名前が記されることは死者に栄誉を与える」とされたが、一方で「女性の名は訃聞には決して掲載されない。なぜなら女性の仕事はすべて内のことであり、外の世界と一緒にしてしまうことは道徳的に禁じられた」［De Groot 1989(1892-1910): 112］ため訃告に記載されることはなかったと指摘している。

デ・ホロートの指摘は興味深く、可能であれば 19 世紀末の中国と英領マラヤで発行された訃告の比較をしたいところではあるが、残念ながら今回収集できたのは 1935 年以降の訃告であるため、本研究で収集した中で最も古い訃告から記載内容について確認したい。


敬告知交

劉君煥章日忠厚致誠待人康慨對於社會公益慈善事業贊助非常熱心鼎力先生曾歷任東安會館董職而留學碧山亭綠野亭古城會館會員董事敬年年六不假年痛於民國廿四年一月六日早六時溘然逝世享年六十有四歲耗傳來聞人等深爲悲悼茲探悉遺族擇定本月八日即陰曆十二月初四日十一點出殯安葬碧山亭之原想

劉君交遊素廣聞訃聞未週特登敬告凡屬與劉君知交者屆期亦臨希案

尾郭文發病所執紼以表哀悼爲荷

民國廿四年一月七日（五）

東安會館
古城會館　董事部同啓

写真 13：訃告
（1935 年 1 月 8 日）

写真 13 は 1935 年 1 月 8 日に掲載された訃告である。「敬告知交」の文字に始まり、公益慈善事業に非常に熱心であった劉氏が 1935 年 1 月 6 日午前 6 時に 64 歳で死去し、1 月 8 日午前 11 時に出棺埋葬されるとある。また劉氏と交流のあった知り合い（知交者）でまだ

彼の死去の事実を知らない者に訃報を伝えるとある。この記事の掲載者は東安会館・古城会館の理事であり、劉氏の親族らしき名前は記載されていない。

敬告知交

公啟者：吉隆坡老巴刹街大興隆布莊東主

余子良（競良）老先生，籍粵埔大留鄉。爾冠南來，習商於新加坡，以誠懇待人，任事負責，爲同鄉戚友所讚譽。一九二六年，創業於本坡暗邦街，嗣以地點不敷發展，遂遷址於老巴刹街十三號，信譽日孚，營業日盛。三十餘年來，勤理業務以外，並曾任雪蘭莪茶陽會館財政及理事，雪蘭莪茶陽同春館產業受托人，雪蘭莪中華百貨商公會發起人，社員，南開學校贊助人，雪蘭莪茶陽勵志社理事，暨聲聞遐邇，譽播社團。近十年來，以哲嗣炎昌，仁昌等，均能卓自樹立，始卸却仔肩，優遊杖履，業務由列哲嗣協力支持，益見蓬勃發展。文孫賢龍，於亞羅士打開新興布莊，賢虎亦已就業，賢豹，賢獅等，均尚在校求學，峥嶸秀茁，桂蘭並茂，福壽兼之，方期克享遐齡，長爲道範，不幸天不假年，竟於公元一九六八年一月七日下午六時，以疾終於正寢，溯生於前清光緒十六年（公元一八九〇），陰曆十月初六日，享壽積閱八十有一，南極埋光，同深悼悼。遺體已於一月八日入殮，擇於本年一月十日下午八時成服，營齋家奠。十一日（星期四）上午十時，由治喪處發引安葬於吉隆坡美芝律廣東義山之原。凡屬余府戚族友好，請屆時前往禮弔執紼，以表哀忱。此啓。

余府治喪委員會敬告

地址：吉隆坡半山巴巴沙律一一九號

写真 14：訃告

（1968 年 1 月 9 日）

次に 1968 年 1 月 9 日掲載された余子良氏の訃告をみてみよう（写真 14 参照）。この記事も「敬告知交」に始まり、依頼者はクアラルンプール・ラオパサ通りの大興隆布荘という生地を扱う店舗の店主となっている。それとは別に葬儀委員会が告知を行う形式になっている。この記事にも先の訃告同様に死去した余氏の親族名などは一切記載されておらず、代わりに死去した余子良という人物のライフヒストリーが下記のように詳細に記されている。

> 余子良（競良）さんは、広東省大埔？出身で若い時に南洋に渡り、シンガポールで商業を学び、誠意をもって接客にあたり、責任ある仕事を任され、同郷の親族や友人のために尽力した。1926 年暗邦街（アンパン？）において創業し、ラオパサ街 13 号に移転した後も商売繁盛であった。…30 年以上を携わった本業の他には、スランゴール州の茶陽会館財務委員と理事を務め、……南開学校の賛助人となり、スランゴール中華百貨店商公会の発起人及び理事となり…不幸にも 1968 年 1 月 7 日午後 6 時に逝去した。……生日は光緒 16 年（1890 年）陰暦 10 月 6 日、享年 81 歳だった。11 日午前 10 時にクアラルンプールの広東義山に埋葬される……。

デ・ホロートによれば 19 世紀末の中国ではできる限り多くの男性親族の名称が訃聞に記載されたというが、1935 年、1968 年の訃告を見る限りそのような傾向は確認できなかった。訃告によって親族の広がりを可視化するというよりは、移民労働者として南洋に渡った個人の成功譚を書き記す場所として訃告は機能していたようである。

訃告

不孝 鈞城 機城 侍孝無狀謹註

先慈林門雷太夫人 壽於一九七零年元月廿八日上午六時壽終內寢，享生於乙卯年七月初拾未時，終於己酉年十二月廿一日卯時享年五十五歲不孝等隨侍在側親視含殮即日遵禮成服深得二月一日星期日上午十一時發引遷山安葬於廣惠堂碧山亭之原，恭屬

孝男 鈞城 國城
孝女 妙珍
女婿 賀爾雄
外孫男 賀世光 世宗
侄男 源釗 源杰 枝培 枝長
侄女 金玉 蓮英
侄婿 羅仕傑
侄媳 范氏
侄孫男 林志忠 志恩 志偉
侄孫女 林美娟 美玲 雅琴 雅韻
反聖夫 林增

姻族 世友 鄉親 聞 誼哀此訃

一九七〇年元月廿九日

敬告知交

廣東林氏公會名譽會長
岡州會館名譽會長
新加坡孫逸仙紀念堂董事會會長
星洲廣東太極健身社會員
新加坡金蘭律門牌八號林聲遠電工程

林程增先生 德配
雷氏夫人 系出名門業經內隨相夫教子和藹可親

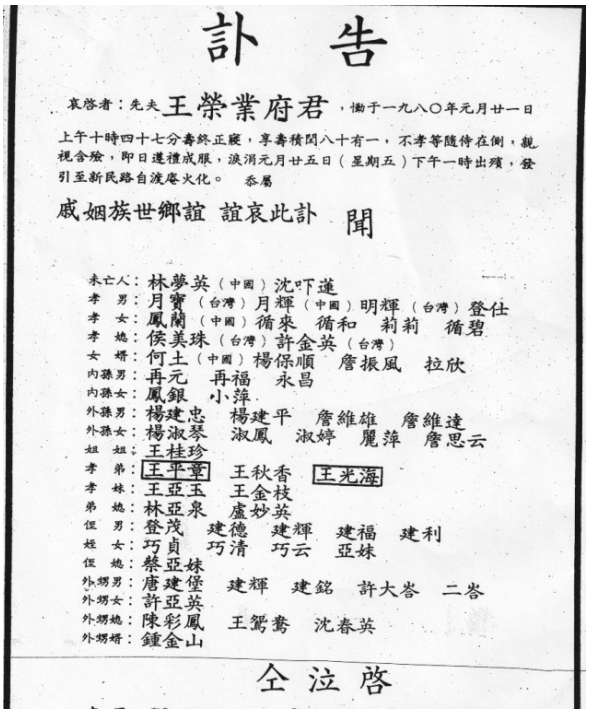
林先生國卓然於社會深資內助之力所出令子長男鈞城現負笈美國倫敦大學工程系次男國城在倫敦助父業女兒妙珍服務於銀行界女婿賀爾雄君亦屬商界英材全皆英俊有為孟母教然也方期殿賞遐齡不幸於一九七零年元月廿八日上午六時壽終內寢享年五十有八聞訃親朋各界無不悲悼之情況值年元月廿九日上午十一時發引遷山下葬於廣惠堂碧山亭之原茲定元月廿九日起寫各親友及社團輝煌之時間凡慕親誼交情者請按址前往吊唁及執紼以盡追悼此啓

地址：新加坡國華大廈一號四〇，光明酒店樓二十號
No. 20, Cherry Avenue, off 61 M.S. Bukit Timah Road.

治喪委員會

廣東林氏公會

林聲遠 林聲遠 林聲遠



訃　告

哀啓者：先夫王榮業府君，慟于一九八〇年元月廿一日上午十時四十七分壽終正寢，享壽積閏八十有一，不孝等隨侍在側，親視含殮，即日遵禮成服，淚消元月廿五日（星期五）下午一時出殯，發引至新民路自渡麥火化。　忝屬

戚姻族世鄉誼　誼哀此訃　聞

未亡人：林夢英（中國）沈吓蓮
孝　男：月寶（台灣）月輝（中國）明輝（台灣）登仕
孝　女：鳳蘭（中國）循來　循和　莉莉　循碧
孝　媳：侯美珠（台灣）許金英（台灣）
女　婿：何土（中國）楊保順　詹振風　拉欣
內孫男：再元　再福　永昌
內孫女：鳳銀　小萍
外孫男：楊建忠　楊建平　詹維雄　詹維達
外孫女：楊淑琴　淑鳳　淑婷　麗萍　詹思云
姐　姐：王桂珍
孝　弟：王平章　王秋香　王光海
孝　妹：王亞玉　王金枝
弟　媳：林亞泉　盧妙英
侄　男：登茂　建德　建輝　建福　建利
姪　女：巧貞　巧清　巧云　亞妹
侄　媳：蔡亞妹
外甥男：唐建堡　建輝　建銘　許大峇　二峇
外甥女：許亞英
外甥媳：陳彩鳳　王鴛鴦　沈春英
外甥婿：鍾金山

仝泣啓

写真 16：訃告

（1980 年 1 月 23 日）

写真 16 は 1980 年 1 月 23 日に掲載された訃告である。この記事は妻が掲載者である体裁をとっている。王氏は 1980 年 1 月 21 日午前 10 時 47 分に 81 歳で亡くなり、25 日午後 1 時に出棺し火葬されると記載されている。この訃報の通知先は、遠い関係の親戚を指す「戚」、故人とその母や妻、娘を介してつながる人間関係である「姻」、家族の範疇である「族」、仕事上に知り合った「世」、同郷の友人「郷」［上水流 2004: 46］の範囲と記載されている。またスペースの半分以上を使って遺族の名前が書き連ねられている。死者には中国に残した妻と、現在の居住地であるシンガポールの妻の二人がいたようで、息子や娘についても中国や台湾に住む者についてはそのように付記されている。

1980 年代になるとデ・ホロートの指摘したような親族関係をできる限り書き記した訃告が数多くみられるようになる。しかしながら、この訃告のように、その多くは男系親族に限らない娘の子ども、孫など女性傍系親族も含む拡大親族のかたちであることが多い。

3.4.2　死に関する記事にみる社会関係のシークエンス

さて最後に 2000 年代以降の死に関する記事の特徴について簡単に概観したい。2000 年代以降に顕著なのは、訃告、挽詞、泣謝などの記事が連続して掲載されるという点である。具体的な記事をみながらこの新しい傾向について考えてみたい。

図 3：死に関する記事のシークエンス

図 3 は死に関する記事の一連の流れを示したものである。ある者が死去すると（2012 年 1 月 4 日）、「訃告」が新聞に掲載される（1 月 5 日）。そこには葬儀が行われる場所、時間、連絡先、埋葬墓地の所在が告知され、遺族の親族名称と姓名が紙面上に記載される（1 月 5 日）。この訃告には、すでに死去している妻（妻）、3 人の息子（孝男）とその妻（孝媳）、4 人の娘（孝女）とその夫（女婿）、すでに死去している兄（兄）とその妻（兄嫂）、弟（弟）とその妻（弟媳）、姉（姐）とその夫（姐夫）、妹（妹）とその夫（妹夫）、孫息子（孝孫男）、孫娘（孝孫女）とその夫（孫婿）、外孫（外孫男、外孫女）、曾孫（外曾孫女）の順に遺族の親族名称と姓名、専門職に就いている者はその名前の右側に職業が記載されている（弁護士、測量士、医者等）。

訃告が掲載された翌日の 1 月 6 日には、姻戚による弔意記事「挽詞」が二つ掲載されている。一つは妻の両親（姻親翁）、妻の兄（内兄）とその妻（内嫂）、妻の弟（内弟）とその妻（内弟媳）、妻の姉（内姐）とその夫（内姐夫）の名前が掲載されたもので、もう一つは故人の弟の妻のキョウダイ夫婦 3 組が連名で掲載したものである。また他にも同日に故人の息子たちが所属する社会組織（福建会館、ジョホールバル書芸協会など）による弔意記事が掲載されている。

図 4：死に関する記事のシークエンス

図4 は2012 年1 月3 日に69 歳で死去した女性の訃告である。訃告は1 月5 日に掲載され、1 月7 日午前11 時に葬儀が行われることを報じている。この訃告は、小売業理事を務める長女を筆頭に、その他の3 人の娘（うち1 人はすでに死去している）、長女と同じ小売業理事を務める長女の夫が掲載者となっている。女性は離婚しているのか、夫の名前は記載されていない。遺族の名前は、故人の兄（胞兄とその妻（兄嫂）、妹（胞妹）とその夫（妹夫）、故人の娘（孝女）とその夫（女婿）、孫（外孫男・外孫女）とその配偶者（外孫媳）、曾孫（外曾孫女）が掲載されている。

訃告が掲載された同日には長女夫婦の取引先企業、付き合いのある企業41 社と個人の名前による弔意記事が掲載されている。続く1 月8 日には前日7 日に無事に葬儀が行われたことを報告し感謝する「泣謝」が掲載されている。この記事の掲載者は故人の4 人の娘のうち、すでに亡くなった1 人を除く3 名とその夫の計6 名である。

2000 年代になると親族（女性傍系親族も含む）を中心とする訃告がほとんどとなり、かつて見られた社会組織や業縁による葬儀案内は全く見られなくなった。しかしながら、すでに移民社会とはみなされなくなったマレーシア華人社会において、親族以外の社会関係である互助組織などの社会関係がもはや重視されなくなったというわけではない。それは、

姻族、友人、社会組織、企業など様々な社会関係による弔意記事が掲載されていたことをみれば明らかであろう。初期の訃告では重視されていた社会関係は、今日、訃告と挽詞とに分離され、死という局面に故人の生前の社会関係を具体的に可視化させる役割を担っている。

この社会関係は、告知広告記事として新聞紙上に掲載されることにより具体的に「切り取り」、「保存され」、「回覧される」モノとして流通し、消費される［Kopytoff 1986］が、この点も告知広告記事の興味深いところである。実際、華人の葬儀では新聞に掲載された訃告、挽詞を切り抜き貼り出したものを掲示することもある。つまりこれらの死に関する記事は、新聞に掲載しそれで役割を終えるのではなく、葬儀という場に持ち出され、生前の人間関係を雄弁と語る存在となる。

人類学者ユンシャン・ヤンは、中国黒竜江省の調査地域において様々な機会にやり取りされるモノとそこから作られる関係性を「関係（guanxi）」と「人情（renqing）」という二つの概念を軸に議論している。ヤンはアメリカの社会学者アーヴィング・ゴフマンを引用しながら、贈与物は「結びつきのしるし（tie-signs）」［Goffman 1971: 194］であり、モノのやりとりは贈り手と受け手の関係のあり方の証拠（evidence）であることを指摘している［Yan 1996: 106-107］。つまりこのようなモノのやりとりは、関係性がモノ化する過程であると考えることもできるだろう。死に関する記事のシークエンス、特に訃告から挽詞までの一連の流れは、死という局面に故人がそれまでの人生で構築した社会関係を可視化させる「結びつきのしるし」であると考えることもできそうである。

4. 理想の家族、現実の関係

ここまでみてきたように、死に関する記事の増加は極めて今日的な事象であることが明らかとなった。また、訃告の記載内容についても時代による大きな差異が認められた。特に、1935 年、1968 年の訃告では葬儀案内を出しているのは死者とは非血縁関係にある者だった点に注意する必要がある。1935 年に掲載された訃告からは、故人が生前に所属していた社会組織が主体となって葬儀案内を行う様子が看取でき、1968 年の訃告からは故人と職業上の付き合いがあった業縁者を中心として葬儀委員会が立ち上がる様子が見て取れるだろう。

1935 年の訃告の場合、死者は1871 年生まれの中国人である。その詳細は分からないが恐らく若い頃に南洋に渡り現地中国人社会に深く関わりながら身を立てた人物であると推察できる。同様に、1968 年の訃告の死者も1890 年生まれの広東省出身の中国人である。19 世紀後半から20 世紀初頭にかけてのマレー半島の中国人社会の男女比は典型的な移民社会のそれであり、労働移民として渡来した中国人男性の数が女性の数を圧倒的に上回る状態にあった。シンガポールやマラヤで家族を持つ者も増えつつあったが、それでも当時は単身南洋に渡った者が多かったことから、血縁関係にある親族・家族関係よりも同郷出身者同士の地縁関係や同業関係者により構成される同業会、商公会などが中心的社会関係

の場であったことが推測される。

しかしながら、1970 年代になると中国から渡来した移民労働者たちがマレーシアで現地化する様子が訃告から読み取ることができる。それまでの初期移民社会では、移民労働者である男性を中心に組織される同郷団体などの社会関係が〈家族〉の役割を代理していたが、1970 年の訃告（写真15）では故人の親族が掲載した葬儀案内と故人の所属した社会組織が掲載した葬儀案内の二つが同日に掲載されている。1980 年代になると訃告は完全に故人の遺族により掲載されるものとなっており（写真16）、「世」（仕事や付き合いの上での知り合い）や「郷」（出身地を同じくする知り合い）などのこれまで葬儀を告知する主体であった非血縁者が、今度は告知される側になっていることが分かる。

親族名称が記載されるようになってからのマレーシア華人社会における訃告には、デ・ホロートが指摘したような女性排除の傾向は認められなかった。むしろ、下の世代の女性傍系親族も含む双系的なかたちに変化していた。また最後に概観した2000 年代以降の死に関する記事のシークエンスの興隆からは、かつては単純に記載されていた訃告が細分化され、訃告は親族を中心とした社会関係により掲載されるものに、一方の挽詞は故人や遺族を中心とする社会関係によって掲載されるものへと拡大進展していることが明らかとなった。つまり、〈家族〉の範疇と社会関係を明確に分離する傾向が見られると同時に、今日みられる訃告の増加傾向は、血のつながらない他者とのつながりを重視しながらも、移民社会として出発した華人社会が現地社会において長きに渡り展開できずにいた世代間の連続性が表明できる時代に入ったことを予感させる。

漢族社会では「五世同堂」と称され父系的につながった父、息子、孫、曾孫、高孫が共に暮らし、同居同財を実現することが理想とされ、瀬川昌久によれば父系傍系型拡大親族は、清代以前から存在する家族の理想型だとされる［瀬川 2004: 100］。しかし本稿でみてきたように、『星洲日報』に表れた実際の社会関係は必ずしも父系拡大親族とはいえない多様なものであった。

今日、人類学における親族研究は、かつてのような中心的研究テーマの座を占めることが少なくなっている。しかしながら、東アジア研究においては、親族研究は一定の重要性を持ち続けてきた。瀬川は次のように述べる。

> 父系出自理念によって親族・同宗を認識することそれ自体は、中国社会に広く共有された社会慣行であり、それは「姓」のシステムや漢語の親族名称体系、それに父系拡大家族や父方居住を志向する家族観などと深く結びつきながら支えられてきた。子供が父姓を名乗ることや同宗者との結婚を回避しようとする傾向が続き、また父母の兄弟を「伯父・叔父」（父の兄・弟）／「舅父」（母の兄弟）、イトコたちを「堂姐妹」（父の兄弟の娘）／「表姐妹」（母の兄弟姉妹の娘、父の姉妹の娘）と

呼び分ける親族名称体系が使われ続ける限り、意識の上での父系出自理念は中国社会全体において維持され続ける。

しかしながら、こうした父系出自の認識にもとづいて、父系親族が実際に何らかの共同行動を行ない、「親族集団」などと呼び得るものが形成されるかどうかは、全く別個な話である［瀬川 2004: 221］。

父系出自理念が中国文化において持続的に培われてきた社会理念であったことは否定しようもない事実である。しかし同時に、父系出自理念によって現実の社会生活のすべてが再現されるものではないことは、漢族社会をフィールドとする多くの人類学者が指摘するとおりである［堀江 1981: 299; 佐々木 1999: 127; 瀬川 2004: 220］。父系出自理念が顕在化する場面は状況的であるにもかかわらず、これまでの漢族社会研究では、父系理念が現れる事例に焦点をあてるがために行為の結果に着目する視点が中心となってきた。つまり「現実のモデルからモデルの現実へ横滑り」［Bourdieu 1977: 29］し、理念が行為を決定するという考え方が支配的な研究視座になっていたといえる［常田 1995: 268-269］。

告知広告記事の研究資料としての価値をあえて指摘するならば、族譜のように理想とされる父系系譜理念を記述した文字資料とは異なり、本稿で示した通り「現実の社会関係」の断片を我々に示してくれるという点にあるのではないだろうか。

おわりに

本研究は、マレーシア華人社会における人間関係、特に親族関係の変化をマレーシアで発行される『星洲日報』に掲載された告知広告記事の検討を通じて明らかにすることを目的とし、現地調査で収集した1920 年から2012 年までの告知広告記事に基づきながらその変遷をみてきた。また、これまで研究対象としてはあまり取り上げられることのなかった告知広告記事に焦点をあてマレーシア華人社会の社会関係の変遷を考察するための資料としての可能性を指摘した。

これまで概観してきたように、告知広告記事はマレーシア華人の社会生活において重要と思われる節目に掲載されるものであり、そこには父系親族関係のみを重視するわけではない実際の社会関係が看取できた。「訃告」には、確かに父系親族概念に基づく親族範疇が現れるが、それは故人や掲載者の意図を反映した範疇であるといえる。すでに述べたように、それは理念としての範疇というよりは、つながりを強調することにより利益を引き出すことができる範疇にずらされている可能性が高いということが予見できるのである。実際、父系親族だけではない姻族や外甥、外孫の名前まで書き連ねるものも数多くあった。

今後の課題は山積しているが、十分に分析しきれていない資料を再度整理し、特に訃告に記載されている親族名称を整理することにより、親族関係の範疇を明らかにする作業を行いたい。また、告知広告記事としてモノ化した社会関係は、実際の人間関係とどの程度ずれがあるのかという点は今回の資料分析だけでは明らかにならないため、参与観察によ

ってさらに総合的に検証したい。可能であれば、参与観察および聞き取り調査から、本稿では言及できなかった個人（recipient）でもなく、広告を掲載する人たち（donor）でもない、広告記事を目にする第三者（reader）がどのようにそれらをとらえているのかについて明らかにしていきたい。

参考文献

Bourdieu, Pierre. 1997. Outline of a Theory of Practice. Cambridge: Cambridge University Press.

Chang, Kyung-Sup. 1999. "Compressed Modernity and Its Discontent: South Korean Society in Transition." *Economy and Society* 28(1): 30-55.

————, 2010. "Individualization without Individualism: Compressed Modernity and Obfuscated Family Crisis in East Asia." *Journal of Intimate and Public Spheres* Pilot Issue 23-39.

陳蒙鶴、2008、（胡興榮訳）《早期新加坡華文報章與華人社会（1881-1912》広州：広東科技出版社（Chen, Mong Hock 1967. The Early Chinese Newspapers of Singapore1881-1912. Singapore: University of Malaya Press.）

De Groot, J.J.M. 1989[1892]. *The Religious System of China: The Religious System of China: its ancient forms, evolution, history and present aspect, manners, customs and social institution connected therewith; vol. 1*, Taipei: Southern Material Center.

Goffman, Ervin. 1971. Relations in Public: Microstudies of the Public Order, New York: Basic Books.

堀江俊一、1981、「台湾漢族の"家族"——jia イデオロギーとjia 集団」『民族学研究』46 (3) : 299-314.

伊賀司、2010、「マレーシアにおける華語紙をめぐる政治：MCA による『南洋商報』買収事件に注目して」『アジア・アフリカ地域研究』10(1): 35-66.

上水流久彦、2004、「親族関係の分析にみる訃聞の資料的価値——戦後台湾の訃聞を中心に」『アジア社会文化研究』5: 44-68.

Kopytoff, Igor. 1986. The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In A. Appadurai, ed., The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective, 64-91. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

劉雪雁、2002、「中国語メディアのネットワーク化と新たな展開」東京大学社会情報研究所情報メディア研究資料センターニュース 14 号.

櫻田涼子、2009、「関係をつむぐ：マレーシア華字紙の告知広告記事にみる人間関係の一側面」『華僑華人研究』6:　81-97.

————、 2010、『家をめぐる人類学的研究——マレーシア華人とテラスハウスの相互構

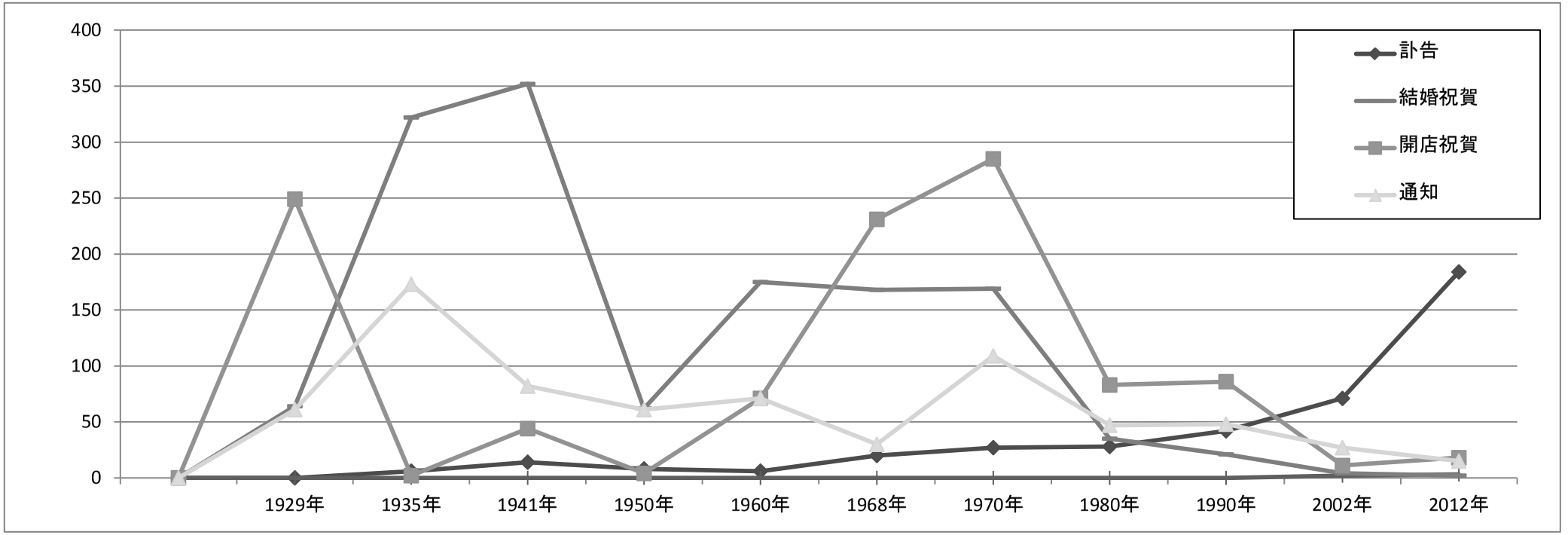
築的民族誌』筑波大学博士学位請求論文.
————、 2011、「都市と故郷の往還的移動による家の維持――マレーシア華人社会における女性の労働と子どもの養育をめぐる人類学的研究」京都大学グローバル COE プログラム親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点 ワーキングペーパー次世代研究 57.
佐々木衛、1999、「中国における父系親族構造の継承と組み換え」『中原と周辺――人類学的フィールドからの視点』末成道男（編）風響社、127-147.
瀬川昌久、2004、『中国社会の人類学――親族・家族からの展望』世界思想社.
戴國煇、1991、「華僑とは誰か、華僑問題とは何か？」『もっと知りたい華僑』弘文堂.
胎中千鶴、2008、『葬儀の植民地社会史―：帝国日本と台湾の〈近代〉』風響社.
玉置充子、2004、「華南の３大学機関を訪問し研究者と交流」拓殖大学海外事情研究所華僑研究センターニューズレター　第 3 号.
常田夕美子、1995、「イエ相続の実践―参加と再生産をめぐって」福島真人（編）『身体の構築学―：社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房、 261-295 頁.
内田直作、1967、「三藩市唐人街の社会構造（六）：広肇帮の一典型」『成城大学経済研究』25：85-109.
Yan, Yun-xiang. 1996. The Flow of Gifts Reciprocity and Social Networks in a Chinese Village, Stanford: Stanford University Press.
卓南生（編）、1980、《従星洲日報看星洲 50 年：1929-1979》新加坡：星洲日報。

インターネット資料
星洲日報広告価格　http://www.sinchew-i.com/ratecard/index.phtml?sec=sc　（2012 年 4 月 2 日閲覧）
地方版広告価格　http://www.sinchew-i.com/ratecard/index.phtml?sec=scregional（2012 年 4 月 2 日閲覧）
ASTRO Malaysia http://www.astro.com.my/portal/about-astro（2012 年4 月2 日閲覧）

新聞
星洲日報
The Star

参考資料　告知広告記事数の概要

	訃告	挽詞（個人）	挽詞（団体）	挽詞（混合）	挽詞（企業）	泣謝	訃告更生	年忌供養	結婚祝賀	栄誉祝賀	開店祝賀	通知
1929年	0	0	0	0	0	3	0	0	64	0	249	61
1935年	6	16	3	0	3	15	0	0	322	0	2	173
1941年	14	103	24	31	19	10	0	0	352	10	44	82
1950年	8	6	4	2	2	6	0	0	62	6	4	61
1960年	6	41	16	7	4	21	0	0	175	27	71	71
1968年	20	59	38	0	30	36	0	14	168	52	231	30
1970年	27	69	48	43	50	31	0	6	169	47	285	109
1980年	28	65	23	0	50	20	0	9	35	20	83	47
1990年	42	40	43	5	77	14	0	8	21	9	86	48
2002年	71	21	46	11	83	19	2	20	4	7	11	27
2012年	184	11	58	10	57	23	3	29	2	49	18	15



2011 年度次世代研究「理想の家族、現実の関係：再編されるマレーシア華人社会の親族関係」（研究代表：櫻田涼子）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2011 年度プロジェクト時点

櫻田 涼子 （京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）